

平成 19 年 度

事業報告及び決算書

財団法人 音楽鑑賞教育振興会

## 目 次

平成19年度事業報告書	・ ・ ・ ・ ・	1
期中重点施策についての報告	・ ・ ・ ・ ・	2
個別事業の報告		
研 究 事 業	・ ・ ・ ・ ・	3
助 成 事 業	・ ・ ・ ・ ・	4
普 及 事 業	・ ・ ・ ・ ・	10
ソ フ ト 開 発 事 業	・ ・ ・ ・ ・	11
出 版 事 業	・ ・ ・ ・ ・	12
松 本 記 念 音 楽 迎 賓 館	・ ・ ・ ・ ・	13
平成19年度収支決算	・ ・ ・ ・ ・	14

## 平成19年度事業及び収支報告書

当振興会は事業開始から40年目、財団設立から35年目の年度を終了した。

### I. 概要報告

音楽鑑賞教育振興会（音鑑）のこの1年間の活動は、確かな普及活動への足がかりを作ること注力したものだ。音鑑35年の歴史をもってしても、鑑賞指導のなんたるか？この財団の研究結果が、すべての指導者に行き届いているとは言えないのは残念な実態である。それは情報の伝え方に制約があるとはいえ、受取側の実態を無視しての伝達は成り立たない結果ではなかったか。書籍を読まないという意味ではなく、利便さと言った意味で文字離れをしている世代の学級経営者への伝達が、月刊誌のその検索機能もなく動画も音も出せない形での伝達だけでは不十分であることは自明となっていると考え、インターネットを利したウェブネットによるコミュニケーション手法を導入し、組立てる開発を行なった。月刊誌もそうであるが、地域差のない伝達方法であるばかりでなく、将来利用者との双方向の通信を期待させるものもある。そして各地を回って歩く効率の悪さを見てきた音鑑にとって、たどり着く必然の道具であると考え。受取側のインターネット利用度が更に上がり、開発したプログラムのコンテンツの充実と、利便性の発展が、これまでの確かな道案内のないがゆえに難しいとされた音楽鑑賞指導法を、指導者の掌中に自信となって届く結果を生むことを信じた。

こうした教育支援事業の柱を打ち立てると同時に、未だ事業として取り組むに至らない松本記念音楽迎賓館の扱いという課題にも取り組んだ。これまでの経緯と反響を客観的に捉えた結果、音鑑が保有し続ける根拠と所轄官庁から指摘される公益性の面で、脈絡の取れる可能性が出て来た。それはひとつには所在地域の世田谷区の音楽事業部との連携であり、もうひとつは音鑑が所持する音楽資料や購入したり預かっていたりする鍵盤楽器の利用企画を合わせて提示することで、ある種の博物館機能を持つことである。こうして本格事業化への意志を固めた上で、一人でも多くの利用者を得ることは、目に見える損益の改善であり、従来の教育関連事業よりも具体性がある目標でもある。その確認を得て、松本記念音楽迎賓館に事務局を移し、少ない人員で常時お客様の満足が得られる体制を取ったが、これは家賃出費の軽減にも繋がった。

こうして選択の幅があった課題に方向を定めるとともに、今後の財団運営に関しては、事務局のひとりひとりが、利益を生む人材となるべく、権限委譲による主体的な業務への取り組みを求めた。それぞれがチャレンジ目標を持って改革を体験し、真の力を付けることが、旧態の財団志向から完全に脱却せねばならない音鑑の求める道であり、存続する鍵であると考え。

### 予算実績の概要

平成19年の収支は、収入が予算114百万円のところ実績133百万円で19百万円の増加。支出は予算199百万円のところ162百万円で37百万円減額の結果、対予算で55.5百万円の収支改善をすることができた。

収入の増加は運用利息と松本記念音楽迎賓館の収入増があり、支出の減額はコスト意識の徹底した事業運営によるもので、管理費に含められる人件費でも昨年度を基準に作った予算を下回る実績で終わった結果である。

## 1. 【期中の重点施策についての報告】

19年度設定の重点施策に従い報告する。

### (1) 電子情報ボードを活用した音楽科指導の手引き開発

課題設定のときは、教室で音盤のかけ替えや、楽曲の頭出し、その他鑑賞に必要な教材画面を教員が自由に取り揃え、取り出しやすいプログラムと、それを計画的な指導案と結びつけることで企画していたが、音鑑の発信する基本的な考えが、指導計画作成の支援に比重を置いたものであり、後者を強調するところとなった。年度内に器となるプログラムを完成、さらにコンテンツの充実を以って、インターネットを通じて利用を促進する計画に繋がる。

### (2) 月刊誌「ONKAN」の二極読者対応

音楽教育に携わるトップクラスの読者と、明日の授業の組み立てに苦慮する若手教員ではおのずと必要とする情報が異なることから、これからの音楽科教育を考える論述と、研究委員会が残したノウハウの二本立ての編集方針を再確立し、鑑賞指導に向かう本道を歩む月刊誌を確立した。内容は目的に沿ったものと関係者に評価されている。このことに際し、小原常務理事の大綱的方针のもと、名古屋芸術大学教授山本文茂氏の基本構成と監修を得て、外部編集委託者および音鑑事務局の事業担当が一堂に会しての編集会議を定例化して進めた。

### (3) 記念館事業の見極め

この一年間で松本記念音楽迎賓館をどう事業化するかを決めることで動いた。

その結果、寄付行為にある音楽鑑賞教育の一般対象の建物として、収益を改善しながら利用度を年々向上させて行くことを実現するため、期中に事務局を松本記念音楽迎賓館に移転し、事業の集中効果を求めた。このため音鑑としては大幅に経費を削減できることになったが、収益を上げるには常連客の確保に向けた広報宣伝活動が必要となる。

### (4) 研究成果の普及

講習会後援といった消極的な支援から、音鑑で培ったノウハウの積極的移植をめざし、普及活動を行なった。本年度は講師と事務局帯同で4地域を回り、それぞれ音鑑の新しい講習会のあり方として認識を高めてきた。

新・冬の勉強会も、新学習指導要領の開示目前で講演内容に制約があることを考慮し、初めて教科調査官の講演なしで開催したが、参加者は安定しており、定着した勉強会となった。

### (5) 公益法人改訂に伴う事務局活動の推進

所轄官庁のからご指摘いただいている財団としての問題をクリアし、新公益法人への移行への体を整える時期に入っているが、まだ所轄の財団でこの申請をしたところはない。

具体的な事例が出てくるまでは、内部の財政強化を図ることとし、平成19年度は松本記念音楽迎賓館の位置付けの明確化についてのみ取り組んだ。

尚、本年度からの会計は新しい財団に求められる会計方法に切り替えた。

## II. 個別事業の報告

### 1. 【研究事業】

#### (1) 研究事業委員会

研究内容全体の確認と連携を図る委員会として研究事業委員会を構成した。また、7月の「第31回夏のセミナー」、12月の「第5回新・冬の勉強会」の企画、構成を行なった。

##### ①第31回「夏のセミナー」の企画

「子どもを惹き付ける授業とは」、またその上で、確実に力を身に付けられる「ねらい」を絞った教材選択と指導法を普及すべく、内容を構成した。

このセミナーの特徴は指導助言者を交えた合宿による小集団研修で、実際に音楽を聴きながら教材選択を体験し、発問を大切にした指導の流れの組み立てを研究する徹底した実践的な研修にある。今年度の事前検討で、現職教員の指導力向上を目指すひとつの研修の形として完成されたものとなった。

※ 研修の日程等は〈助成事業の(6)項、主催講習会〉の項に記載。

##### ②「新・冬の勉強会」の企画

音鑑の一年間の研究成果を提案する場及び音楽科教育の今日的課題を一括して学べる勉強会を、昨年度に引き続いて企画した。一度に全国の多くの教員に情報提供ができる場として、200人規模の受講生を集められる会場や内容を企画構成した。

その企画書をもって文部科学省の後援事業の認定を受けている。

※ 研修の日程等は「助成事業の(6)項、主催講習会」の項に記載。

#### (2) 鑑賞指導部会

児童・生徒に確実に「音楽の力」を身に付けさせるには、魅力的な授業が実践されねばならないという趣旨で、適切な教材選択、効果的な教材の提示方法、発問の工夫に研究のねらいを置いて、鑑賞の指導技術をまとめた。具体的には、客観的でかつ「音楽を理解できる楽しさ」を発見できる指導法の研究を鑑賞指導部会で進める過程で、陥りやすい過ちを浮き彫りにし、それを回避する指導法の考えと指導技術をまとめた。

また、その指導技術を体験を通して身に付けてもらうこと、音鑑から全国に伝播できる機会の核とするため、「第31回夏のセミナー」を企画し実施した。

さらに「第5回新・冬の勉強会」では、研究報告として、鑑賞指導のポイントを事例を用いながら提案した。

#### (3) 研究調査部会

平成19年度の調査活動は計画がなく、平成18年度に実施した小中学校の教員に対する鑑賞指導についての実態調査、児童・生徒に対する「音楽を聴く」ことについての実態調査を報告書にまとめた。

#### (4) 資料室

音鑑が保有する音源や研究資料を、現職教員が教材研究や指導案検討の材料として利用できるように、平日10:00～17:30の間、予約制で利用希望者を受け入れている。

平成19年度は5月の音鑑事務局賃借フロア変更および2月事務局移転に伴い、資料室を一時閉鎖したため利用者は例年より減少した。3月は迎賓館資料室にすべて統合し、平成20年度から土日も含めた利用ができるように整備を進めた。

利用者一人あたり500円の負担を願った設備利用料収入は51,000円。月刊誌購読者は購読特典として利用料を無料とした。

##### ①利用状況 月別利用者数および利用状況 ( )内は重複を含む回答数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
0	4	13	30	93	9	14	6	4	5	0	0	178
利用者勤務先 (178)			%	利用頻度 (178)			%	利用目的 (213)			%	
小学校(145)			81.4	複数回利用(104)		58.4	授業で活用(145)			68.0		
中学校(20)			11.2	利用のきっかけ(161)			指導案作成(24)			11.2		
高校(6)			0.3	紹介(84)		52.1	文献研究(14)			0.7		
大学(1)			0.05	HP(19)		11.8	学校行事(12)			0.6		
他(6)			0.3	月刊誌(16)		10.0	論文研究(6)			0.3		

利用者数は前年370名に対し、48.1%の計178名。

##### ②新規購入資料

DVD、CD、書籍など研究委員会が必要とするもの、および月刊「音楽鑑賞教育」に掲載されたものを中心に購入した。

##### ③資料検索のためのデータ化

月刊誌を中心に、今後開発事業等での活用を考え、音鑑出版の指導事例などを検索できるようデータ化をすすめ、平成20年度ONKANウェブネット公開にあわせ新しい検索システムを開始できるようにした。

## 2.【助成事業】

### (1) 選考委員の委嘱

助成事業実施にあたる選考委員は任期2年間で委嘱しており、昨年度に引き続き次の6名の方々にお引き受けいただいた。

小原光一	音鑑常務理事	(選考委員長)
甲田充彦	全国高等学校長協会元会長、東京都教職員研修センター教授	
西村佐二	全国連合小学校長会元会長、聖徳大学講師	
大橋久芳	全日本中学校長会前会長、東京都台東区立忍岡中学校長	
吉田時雄	聖徳大学元講師	
渡邊學而	音楽評論家、財団評議員	(職名は平成20年3月31日現在、敬称略)

## (2) 第40回 論文作文募集

教職員の努力を賞したいという願いから、論文作文募集事業第40回を記念し、教職員を対象にした随想の部を実施したところ、作文募集常連校担当教諭を始め、応募を促した「おんかん友の会」からの応募が全28点応募の2/3を占めた。同様に実践奨励の部応募数も応募が4点にとどまり、教職員を対象にした部門実施の難しさが残った。

昨年度の応募減少への理由のひとつに、学校での予備審査を求めたこともありとみて、対策として応募数の制限をゆるくし、DMが目立つように大判にして送付した結果、応募数は昨年より多かった。

今年度は募集当初設定した副賞がスポンサーの都合で入選発表時に変更になったため、副賞予算を大幅に越えたが、メール便の活用・参加記念品制作費縮減などにより、事業全体は予算内で実施することができた。

### ①募集テーマ

- ・研究助成の部 『豊かな感性の育成を目ざす音楽教育の研究』にそった下記2テーマ  
「音楽鑑賞指導の研究」  
「ICT機器を活用した効果的な指導法開発」
- ・実践奨励の部 「音楽鑑賞に関わる指導の実践」
- ・作文の部・随想(教職員)の部 「学校と音楽」

### ②募集方法

全国の小・中・高校および、各市町村教育委員会 約42,000件に募集案内を送付。  
その他月刊「ONKAN」誌、ホームページ、および広告代理店を通じリビング誌・各新聞等に記事を掲載。

### ③実施日程

募集期間：	平成19年 6月 1日～	9月30日	
審査：	平成19年10月 5日		第1回審査委員会
	10月 5日～	11月26日	各部門別審査委員会
	11月30日		最終選考委員会
入選発表：	12月 6日		ホームページおよび郵送通知
表彰式：	平成20年 1月27日		目黒・音楽鑑賞教育振興会

### ④応募状況

	第40回	送付数	第39回	送付数	第38回	第37回
研究助成の部	3	3	3	3	6	4
実践奨励の部	4	4	6	6	4	11
小学生の部	2,745	708	2,704	510	4,094	5,059
中学生の部	5,843	481	5,457	411	7,886	5,863
高校生の部	1,048	142	723	87	1,087	1,636
随想の部	28	28	—	—	—	—
作文合計	9,664	1,359	8,884	1,008	13,067	12,558
(応募校数)	310	—	293	—	470	488

⑤入選数内訳（入選者名は月刊「ONKAN」2008.2月号に掲載済）

	入選数	研究助成金／実践奨励の部 副賞				
研究助成の部	1	研究助成金 100万円				
実践奨励の部	4	DVDプレーヤー				
作文の部	最優秀賞	優秀賞	佳作	努力賞	入選計	パイオニア賞
小学生の部	1	2	6	2	11	9 (8)
中学生の部	1	2	6	12	21	14 (12)
高校生の部	1	2	3	1	7	5 (4)
随想の部					10	0
作文の部計	3	6	15	15	49	28 (24)
作文の部 副賞	小中高校生の部はミニコンポ 随想の部はDVDプレーヤー		ヘッドホン			EPD等 ( )は副賞贈呈

⑥審査基準

- ・研究助成の部：学校における音楽鑑賞教育、および音楽鑑賞教育にかかわる音楽科の実践研究計画を選考
- ・実践奨励の部：日頃の授業等において、音楽鑑賞教育の活性化に役立つことが期待される、具体的な計画に基づいた指導の実践事例を選考
- ・作文の部：学校での授業や音楽活動において、音楽を聴く楽しみや喜び、音楽とのふれ合いで得た感動などを、感じたまま素直に表しているものを選考

⑦審査委員 計25名（対前年1名減：委員名は月刊「ONKAN」2007.2月号に掲載）

- ・研究助成の部：3名 ・実践奨励の部および随想の部：4名
- ・作文の部：18名（小学生の部：7名・中学生の部：7名・高校生の部：4名）
- ・審査顧問 全日本音楽教育研究会 福井直敬会長

⑧協賛

- ・パイオニア株式会社 ・パイオニアサービスネットワーク株式会社

⑨後援

- ・文部科学省 ・全国都道府県教育長協議会 ・全日本音楽教育研究会
- ・全国連合小学校長会 ・全日本中学校長会 ・全国高等学校長協会

(3) 海外音楽鑑賞教育視察団の派遣

音鑑の財源の都合で休止している。

(4) 賛助活動

例年通り広告や協賛は、全日本および東京都の小・中・高等学校音楽教育研究会名簿、日本音楽教育学会、日本学校音楽教育実践学会、各ブロックで開催される研究大会プログラムに掲載した。

研究団体への賛助は他に全日本音楽教育研究会、日本音楽療法学会などがあり、財団法人関信越音楽協会、財団法人日本オペラ振興会など演奏団体に対しても行なった。



## (5) 鑑賞教室

- ①恒例となった草津国際アカデミー&フェスティバル参加演奏家による鑑賞教室は、ベルン音楽院教授のイェルク・エーヴァルト・デーラー氏による「バロック音楽における装飾音の扱い」について、講演とチェンバロの演奏を行なった。
- ②ピッコロヴァイオリンの再発見を企図した普及会を松本記念音楽迎賓館に招き、グレゴリー・セドフ氏による子どもにも楽しめるコンサートを実施した。
- ③第40回論文作文入選者表彰式昼食会において、表彰式参加者への鑑賞体験としてバリトン歌手河野克典氏ピアノ浅野真弓氏による日本歌曲を中心とした演奏を行なった。

なお、松本記念音楽迎賓館で連続開催中のジャズライブの企画が定着して来たことから、アコースティック音楽の一端を味わう機会を提供する意味で、平成20年度は鑑賞教室に組み入れることとした。

## (6) 主催講習会

音鑑主催の講習会の普及効果を求め、平成19年度も「夏のセミナー」において、最終日だけの参加しやすい条件で聴講者を募集し、受講者を超える参加を得ることができた。

5回目となる「新・冬の勉強会」は、例年使うオリンピック記念青少年総合センターの会場が予約できず、松本記念音楽迎賓館、パイオニア研修センター、玉川高島屋アリーナホールに分散した会場となった。足の便のためチャーターバスを2台手配したが、土地の事情を知らない会社だったため、進行が厳しかった。それでも多くの受講生は、学習指導要領の改訂を控えた講演内容と、身近に体験できるチェンバロとオルガン演奏に満足といったアンケート結果を得た。

### ①第31回「夏のセミナー」

研究事業委員会の企画を受け、下記の通り開催した。

今年度は、指導事例などの文字情報ではなかなか表しにくい発問の仕方・タイミング、適切な教材の選び方、効果的な教材の提示方法を、シミュレーションを通じて体得することができるように企画した。受講者数は、小学校教員10名、中学校教員7名の計17名で、小学校2グループ、中学校2グループで実施した。

なお、昨年度好評だったことを受け、セミナー最終日のグループ発表を公開とし、聴講希望者を募集したところ約50名の応募があった。実施内容は下記の通り。

### ◎研修テーマ「展開力ある鑑賞指導法を身に付ける」

ア 会場 パイオニア研修センター（二子玉川）

イ 日程

第1日 7月28日（土）

13:00 オリエンテーション 開講式

13:30 講義「鑑賞指導の基本的な考え方」および「研修内容と進め方」の説明

16:30 グループ研修（課題把握と教材研究）・個人ワーク（指導の流れの作成）

18:00 懇親会

20:00 個人ワーク（指導の流れの作成）

第2日 7月29日(日) 終日グループ研修  
08:30 個人ワーク(指導の流れの作成)  
09:30 グループ研修(発問のシミュレーションと助言者によるコーチング)

第3日 7月30日(月) 研修成果の発表と閉講式  
08:30 研修成果の発表(4グループ)  
13:45 総評  
14:00 グループ別、校種別研修のまとめ:受講生  
特別講演:聴講希望者  
15:30 閉講式

ウ 講師 小原光一 音鑑常務理事  
渡邊學而 音鑑評議員、研究事業主管  
エ 助言者 栗飯原喜男 埼玉県川越市立芳野小学校教諭  
徳田 崇 創価大学講師  
中島 寿 筑波大学附属小学校教諭  
大塚弥生 東京都港区立赤坂中学校教諭  
山崎正彦 武蔵野音楽大学講師 (平成20年3月現在)

オ 広報 月刊『音楽鑑賞教育』誌5、6月号  
「論文作文募集」の全国各学校宛てダイレクトメール(6月初旬発送)  
音鑑ホームページ

カ 参加費 受講生:30,000円(交通費は、20,000円を超えた分を財団が負担)  
聴講生:2,000円

## ②第5回「新・冬の勉強会」

音楽科教育の今日的課題を伝え、音鑑の研究内容の普及を図る集中講座として、音鑑の研究成果及び途中経過を公開し、参加者と共に学習指導要領に沿った音楽科教育、特に鑑賞領域の指導のあり方を考えることを中心に据えて実施した。

各参加者自身に関わる費用および印刷資料代を自己負担とし、音鑑は会場費及び講師・演奏謝礼を負担して実施した。

ア 主題 これからの音楽科教育を考える

イ 会場 玉川高島屋アリーナホール、松本記念音楽迎賓館、パイオニア研修センター、  
国立オリンピック記念青少年総合センター(渋谷区代々木)

ウ 日程 平成19年12月26日(水)~27日(木)

第1日 12月26日(水)

13:30 オリエンテーション

13:40 講演「これからの学校教育と音楽科の課題」

講師 音鑑研究事業主管 川池 聡

15:00 研究経過報告「音楽のおもしろさがわかり、進んで音楽を聴く子どもを育てるために」

報告 埼玉県川越市立芳野小学校教諭 栗飯原喜男  
創価大学講師 徳田 崇

筑波大学附属小学校教諭 中島 寿  
東京都港区立高松中学校教諭 大塚弥生  
武蔵野音楽大学講師 山崎正彦  
ワークショップ「オルガンとチェンバロ」  
講師 長井浩美（オルガン奏者）  
渡邊温子（チェンバロ奏者）

第2日 12月27日（木）

- 09:30 講演「月刊誌特集・教育改革に望む」  
講師 名古屋芸術大学教授 山本文茂
- 10:00 特別講演「これからの教育課程の方向」  
講師 文部科学省 初等中等教育局学校教育官 石塚 等
- 11:00 鼎談「これからの音楽教育を考える」  
千葉大学教授／財団評議員 金本正武  
千葉県船橋市教育委員会指導課主幹 佐藤日呂志  
全日本音楽教育研究会中学校部会副会長 工藤豊太
- 13:00 研究経過報告「小中9年間を見通した音楽科教育の実現に向けて」  
報告 音鑑研究事業主管 川池 聡
- 14:00 講演「授業における効果的なICTの活用」  
講師 財団法人日本私学教育研究所主任研究員 山路 進  
東京都荒川区立尾久第六小学校教諭 石井ゆきこ  
東京都東村山市立東村山第四中学校教諭 勝山幸子

エ 受講者 157名（小学校89・中学校49・他19名／うち昨年参加者66名）  
オ 広報 月刊『音楽鑑賞教育』誌10、11、12月号、「論文作文募集」ダイレクトメ  
ール、音鑑ホームページ、各地音研大会研究収録協賛広告等  
カ 参加費 6,000円 資料代込み （音鑑誌購読者は半額）

#### (7) 助成研究発表会

平成19年10月3日に研究発表会を行なった。

・三重県四日市市立日永小学校 白井良昭教諭（平成17年度入選）

「子どもたちの感性を豊かに高める鑑賞指導の研究」

～実際の鑑賞指導の評価・評定方法のよりよいあり方を求めて～

参加者：約100名

### 3.【普及事業】

#### (1) 講習会後援

全国各地で開催される音楽教育研究会、各都道府県および市町村主催の講習会、研修会24件について講師の紹介、派遣の後援を行なった。

希望する講習内容にふさわしい講師の紹介とスケジュール調整や資料準備の窓口としての後援を行ない、講師謝礼や旅費負担など、開催に伴う費用を徹底して主催者に求めて実施したこと、開催準備を主催者に委ね、音鑑事務局同行を削減したことにより、後援支出は予算比25.1%、対前年37.4%に抑えることができた。

講師謝礼は音鑑の基準ではなく、主催者の基準でお引き受けいただいております、遠方での開催で万一主催者が準備できる旅費交通費に不足が生じた場合には、講師負担とならないように音鑑の後援費から支出援助して進めた。

#### ①平成19年度講習会開催件数内訳

各表（ ）内は18年度実績

	後援数	小学校	中学校	小・中	その他	参加人数
講習会	24(19)	12(8)	4(4)	6(7)	2(0)	914(1,257)
体験研修会	普及活動に(2)	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	— (55)
後援数計	24(21)	12(8)	4(5)	6(10)	2(0)	914(1,312)
参加人数計	914(1,312)	773	133	左記	8	

#### ②平成19年度都道府県別開催件数／計24(21)都道府県

4件 神奈川(3)

3件 新潟(0)

2件 栃木(1) 静岡(0) 千葉(2) 兵庫(1)

1件 青森(0) 山形(0) 茨城(0) 石川(1) 大阪(1) 東京(1) 島根(1) 広島(1)  
福岡(0)

#### ③平成19年度講習会講師／計7(7)名・依頼件数順、敬称略

6件 栗飯原喜男(8) 埼玉県川越市立芳野小学校教諭

6件 山崎正彦(4) 武蔵野音楽大学講師

4件 中島 寿(2) 筑波大学教育学部附属小学校教諭

3件 徳田 崇(4) 創価大学講師

2件 渡邊學而(2) 音楽評論家、財団評議員

2件 川池 聰(0) 音鑑評議員

1件 高橋保則(0) 東京都大田区立東調布第三小学校教諭

#### (2) 普及活動

音鑑が将来の事業展開のために、その考え方を伝えたい地域への普及活動として実施する普及活動は、「夏のセミナー」に準じた研修会として、4件実施した。

開催にあたっては主催者側の音鑑夏のセミナー経験者を中心に参加者指導をすすめ、音鑑派遣講師にはその状況を俯瞰し、研究発表時の指導をしていただくことで、これまで本研修会には数名派遣していた講師を最少人数で実施した。

- ・奈良県中学校音楽教育研究会

日 程 7月24日(火)～25日(水)

講 師 長崎大学教授 福井昭史

内 容 ねらいにせまる学習活動を行うための教材研究と効果的な発問の工夫  
教材：オペラ「カルメン」、バレエ「白鳥の湖」

参加者 中学校教員 22名
  
- ・北海道音楽教育連盟札幌市中学校支部

日 程 8月13日(月)9:15～14日(火)16:00

講 師 音楽評論家 渡邊學而  
武蔵野音楽大学講師 山崎正彦

内 容 オペラ「アイダ」を主教材として

  - ① 教材研究
  - ② 発問を想定した授業展開
  - ③ 題材構成

参加者 中学校教員 18名
  
- ・石川県金沢市中学校教育研究会音楽部会

日 程 8月22日(水)～23日(木)

講 師 長崎大学教授 福井昭史

内 容 ねらいにせまる学習活動を行うための教材研究と効果的な発問の工夫  
教材：アジアの音楽、日本の民謡

参加者 中学校教員 12名
  
- ・熊本県水俣市小中学校音楽担当者会

日 程 8月23日(木)9:30～24日(金)15:30

講 師 創価大学講師 徳田 崇

内 容 「管弦楽曲の指導」「歌曲鑑賞の指導」「民族音楽」について  
教材研究と発問を想定した指導の流れ

参加者 小学校教員 15名 中学校教員 10名

#### 4. 【ソフト開発事業】

##### (1) ICTを活用した教材開発

文部科学省が進める教育におけるICT導入に、音楽科としての活用提案を進めるため、「音楽科教育支援システム」を開発した。これは音鑑の研究成果であり、平成19年度末に告示された新学習指導要領にも対応する「小中学校9年間を見通した音楽科教育」の内容を理解し、利用者が指導計画などを作成できるシステムと、その中で作成する1時限単位の指導案を電子情報ボードなどにトレースして授業ができる「授業支援ツール」からなるもので、

外部ウェブデザイン開発会社に依頼し制作を行ない、平成20年度実用に向けてそのシステムのチェック確認を進めている。

併せて資料室で進めている検索データ作成を最大限に活用できる新しい検索システムを開発した。

## (2) ONKANウェブネットの開設

これからの音鑑収入の柱としてインターネットを通した音楽科教育に特化したウェブサイト平成20年秋に公開できるように、「ONKANウェブネット」を開設した。本サイトには上記「音楽科教育支援システム」をメインとして音鑑ブログや資料検索システムを置き、将来的には教材ダウンロードや月刊誌情報なども含めた音鑑からの音楽科教育情報発信を一括するものに成長させて行きたいと考えている。

## (3) 教材DVD

インターネットを通した教材ダウンロードなどを考慮し、現在発売している教材DVD全7タイトルは追加生産を行わず、在庫終了次第終了していく。

本年度はONK-501、506を残し、ほかタイトルを販売終了とした。

なお、教材となる演奏は将来への資産であり、教育のために出演料無償で日本の歌曲を提供してもらい、収録を行なった。また原音権を持つ形でこの収録がCD化された。

出演 河野克典（バリトン） 浅野真弓（ピアノ） 井阪紘（レコーディング）

# 5. 【出版事業】

## (1) 月刊誌『音楽鑑賞教育』の発行

### ①編集方針の組みなおし

平成18年度は月刊誌の公益性が問われ、購読者の増加に答えを求めた。その実現のために、専門家との編集契約を手がかりに、興味を惹く企画、読み易い内容、手に取り易い体裁と写真の増加などを心がけた。しかし費用が掛かる割に購読者の増加は微々たるものであった。また、全国の小、中学校全校に無償で送った月刊誌の大半が読まれておらず、また4万部程度の教員向けの刊行では、広告収入もままならなかった。購読者の増加までにはまだ時間が掛かることとも思えたが、こうした状況に対し、音鑑の月刊誌として伝えるべきものが、ぶれてあちらこちらに行っているといった内容への指摘もあり、この月刊誌の存続価値は、教育の専門誌とすることに方向を戻し、これを実現するべく、山本文茂氏に監修と記事のアイデアを託した。

購読量を左右するのは内容一本の意図で、表紙デザイン費も半減させ、写真等も減らしたため、体裁は昨今珍しい古さを感じさせるものとなってしまった。現在は月刊誌発行の経費18.7百万円に対し、4.3百万円の購読収入の実績であり、購読数も減っていることを考え、月刊誌刊行の価値と財団の経営状況を比較すると、抜本的に見直す時期にある。

## (2) 書籍発行

平成19年度は教職員を対象にした学校生協卸売業者と音鑑書籍の取り扱いを開始した。「小中学校9年間を見通した音楽科教育」全3冊の取扱量がおよそ300セットと順調であったことから、次年度も継続して販売することが決定したためこれを増刷した。また月刊誌「音楽鑑賞教育」の年間購読は平成20年度契約として90名の新規購読を得ている。しかし卸売り価格での提供となるため、販売収入は音鑑直接販売収入の55%程度に留まる。

- ・平成19年5月 「音楽科の『学び』を浮き彫りにした指導と評価の計画とは」  
(音鑑 研究開発部会編)
- ・平成19年6月 「第2回研究調査報告書」(音鑑 研究調査部会編)
- ・平成19年9月 「音楽科の『学び』が見える授業 その指導と評価」  
(音鑑 研究開発部会編)
- ・平成19年11月 「音楽科では何を指導しているのか」 増刷
- ・平成20年2月 「音楽科の『学び』を浮き彫りにした指導と評価の計画とは」 増刷
- ・平成20年2月 「音楽科の『学び』が見える授業 その指導と評価」 増刷

## 6. 【松本記念音楽迎賓館】

平成19年度の音楽迎賓館の環境は前年度の反省と、人材登用の難しい記念館事業の先行き不安定な事情を考慮し、契約管理者を排し、直接事務局の管轄下においた。これにより、人と資金を全体予算の枠で臨機応変に処理することができる体制を得、期中には派遣職員を断って経費を浮かせることに成功した。

ブライダルの専門業者と提携がなくなり、大きな収入源がなくなったが、これを機会に記念館としての性格と、音楽を楽しめる音鑑ならではの施設として広報に改め、音楽を柱とする本来の公益性を前面に出した。音楽鑑賞進行以外の要素で損を出すことはできないからである。この戦略の結果、創業者の記念館として、支援会社が音と音楽を利用した研修の場としての利用度を高めてくれた。

これに呼応する形で8月の閑散期には支援会社の発注により、連続13本のミニコンサートと講演を企画し、一挙にその存在が認識されることとなった。この一連のコンサートのオープニングには、交渉の結果、ショパンコンクール優勝者のスタニスラフ・ブーニン氏の賛助出演、ファイナルセレモニーには鑑賞教室に記述したデーラー氏のレクチャーを置いた一種の音楽祭の形が実現した。

またこうした反響に力を得、チャイコフスキーコンクール優勝者の諏訪内晶子氏も館にお招きし、理事長と懇談の機会を得るなど、将来に備えている。

またアコースティックに優れたホールとして、ジャズライブコンサートも定着し、僅かではあるが収益に貢献を続けている。

その一方で管理者に負担が掛り過ぎては長続きしないため、支援会社の利用度が上がっていることを理由に、人材の支援を受け、現在は2名の管理者のシフトによって、ミニマムコストの運営を行なっている。